慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小泉信三研究序説 - 『青年小泉信三の日記』を中心に -
Sub Title	
Author	池田, 幸弘(Ikeda, Yukihiro)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2005
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.48, No.5 (2005. 12) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	本稿は，若き日の小泉信三（1888-1966）のイギリス滞在，ドイツ滞在時の経験についてできるだけ実証的な論述を与えようとしたものである。初回の小泉の留学は，1912年秋から1916年春にまで及んでおり，文字どおり，悩み多き疾風怒濤の青春時代でもあった。執筆にさいしては，小泉全集のほか，2001年に慶應義塾大学出版会から公刊された『青年小泉信三の日記』を利用した。これは戦時中に焼失した日記のなかで奇跡的に残った資料で，今般小泉家の方々のご好意によってその出版が可能になったものである。いままでも小泉の外遊については彼自身の回想を中心にかなりの情報が入手可能であるが，この日記の公刊がなおも意味を持つのは，原則として日単位で小泉の行動がフォロウできること，そして小泉の集書のプロセスや聴講した講義についてさらに詳細に知ることができることによる。拙稿は，イギリスに足をふみいれてから第一次大戦勃発時までの小泉の行動をこの日記によって追跡したものである。とくに，LSE やベルリン大学で聴講した講義，集書の過程，ジェボンズの子息との面会，そして開戦直前，直後のドイツでの体験に焦点があてられている。なお，本稿の原型たる英文論文はマッコリー大学において，2005年７月５日から８日にかけて開催された第十八回オーストラリア経済思想史学会で報告された。
Notes	故玉置紀夫教授追悼号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20051200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第48巻第5号
2005年12月

2005年10月20日掲載承認

小泉信三研究序説

――『青年小泉信三の日記』を中心に――*

池　田　幸　弘

＜要　　約＞

本稿は，若き日の小泉信三（1888-1966）のイギリス滞在，ドイツ滞在時の経験についてできるだけ実証的な論述を与えようとしたものである。初回の小泉の留学は，1912年秋から1916年春にまで及んでおり，文字どおり，悩み多き疾風怒濤の青春時代でもあった。執筆にさいしては，小泉全集のほか，2001年に慶應義塾大学出版会から公刊された『青年小泉信三の日記』を利用した。これは戦時中に焼失した日記のなかで奇跡的に残った資料で，今般小泉家の方々のご好意によってその出版が可能になったものである。いままでも小泉の外遊については彼自身の回想を中心にかなりの情報が入手可能であるが，この日記の公刊がなおも意味を持つのは，原則として日単位で小泉の行動がフォロウできること，そして小泉の集書のプロセスや聴講した講義についてさらに詳細に知ることができることによる。拙稿は，イギリスに足をふみいれてから第一次大戦勃発時までの小泉の行動をこの日記によって追跡したものである。とくに，LSEやベルリン大学で聴講した講義，集書の過程，ジェボンズの子息との面会，そして開戦直前，直後のドイツでの体験に焦点があてられている。なお，本稿の原型たる英文論文はマッコリー大学において，2005年7月5日から8日にかけて開催された第十八回オーストラリア経済思想史学会で報告された。

＜キーワード＞

小泉信三，ドイツ歴史学派，LSE，キャナン，フォックスウェル，ジェボンズ，シュモラー，ワーグナー，ベルリン

＊　玉置紀夫先生とはじめてお会いしたのは，1982年から84年にかけて慶應義塾大学大学院経済学研究科で開講されていた故杉山忠平教授のセミナーにおいてであった。先生はこのセミナーに参加されていたので，修士の2年間毎週お会いする機会があった。人も知るように先生は図書館のヘビー・ユーザーであったので，図書館ではもちろんお会いした。その後，私の立場が院生からスタッフへと変わっていったこともあり，研究室棟でもしばしばお会いした。一日のうちでもあまりに頻繁にお会いするので，会うたびにお互いに微苦笑を禁じえないほどであった。いまでも，図書館のキュービクル（先生はキュービクルAが常駐の場所で，あたかも先生の特別席であるかのような観を呈していた。）で御研究に励むお姿や，研究室棟ロビーや受付の後ろで新聞を広げるお姿が目に焼きついている。図書館で早足に過ぎ去る人がいると，「もしや，先生では」という幻想にかられることも多々ある。元来西欧経済思想史を専門とする私が日本のことにも目を向けるようになったのは，先生の影響によるところも大きい。本稿の主題が日本経済思想史であるのも，こうしたことによる。御逝去にさいして↗

1．はじめに

慶應義塾を代表する経済学者で塾長をも務めた小泉信三については，直接謦咳に接しえた人を中心に，これまで多くのことが語られてきたしまた書かれてもきた。[1] しかしながら，周辺の歴史的背景をふまえた客観的な研究についてはまだ今後の課題だといわなければならない。とくに慶應義塾関係者は打ち消すことのなかなかできにくい「わが師尊し」の感情を抑制し，また思わず知らずのうちに混入する自らの所属機関についての広報的見地からなる先人の利用を避け，できるだけ冷静な叙述を心がけなければなるまい。本稿はこのような研究を志したものであるが，まだそのような方向をめざしてスタートを切ったにとどまるものである。その意味で，本稿はやはりタイトルに示したように研究序説にとどまるものであろう。

本稿は，若き日の小泉のイギリス滞在時，ドイツ滞在時の経験についてできるだけ実証的な論述を与えようとしたものである。小泉の中長期にわたる外遊は，以下の三回である。本稿で問題にする留学は，1912年秋から1916年春にまで及ぶはじめての外国体験であった。その後，1936年にはハーバード大学創立三百年祝賀会に招待され，８月から11月にかけてアメリカに滞在している。戦後，1953年５月から10月にかけては，ふたたびイギリスを訪れ，このたびはそのほかヨーロッパ諸国とアメリカをもまわっている。短期の滞在を除けば，外遊はこの三回に限られる。その間の小泉の立場も大きくかわった。初回の留学は慶應義塾に奉職してから間もない若い研究者としての滞在であったし，1936年のアメリカ滞在時に小泉は慶應義塾長の要職にあった。また，戦後三回目の外遊は厳密には同行ではないが皇太子殿下（当時）の洋行に伴うものであった。ハロッドやスラッファと直接話をする機会があったのもこのおりである。

本稿執筆にさいし主として利用したのが2001年に慶應義塾大学出版会から公刊された『青年小泉信三の日記』[2] である。これは戦時中に焼失した日記のなかで奇跡的に残った資料で，今般小泉家の

↘暗然たる思いであるが，いまはただ先生のご冥福を祈るのみである。なお，本稿の原型たる英文論文はマッコリー大学において，2005年７月５日から８日にかけて開催された第十八回オーストラリア経済思想史学会で報告された。（英文タイトル：Shinzo Koizumi (1888-1966): A Japanese Economist's Encounter with the West）また，これに先立ち，本稿の一部は本塾経済学研究科設置科目「経済思想」（The Japanese Tradition of Modern Economic Thought）で報告された。さまざまな反応を示してくれた学会とセミナーの参加者にたいして感謝する。

1）　伝記としては今村武雄（1987）がある。今村氏は小泉門下で，全集の刊行にさいしては重要な役割を果たした。さらに，全集別巻には詳細な年譜が付されている。以下，伝記的な情報についてはこの両者に負うところが大きい。御遺族の回想については，秋山加代（1981），秋山加代（1976），秋山加代，小泉タエ（1968），小泉タエ（1994），小泉タエ（1981），小泉タエ（1976）などを参照。また，慶應義塾関係者の筆になる小泉論としては，たとえば福岡正夫（1994），丸山徹（1983），白井厚（1996），白井厚，浅羽久美子，翠川紀子編（2003），高橋誠一郎（1966），寺尾琢磨（1966）などを参照されたい。

2）　小泉信三（2001）。これ以降，『青年小泉信三の日記』からの引用については，たんに日記：○○ページとする。なお，小泉の著作，日記からの引用にかんしては，漢字，送り仮名などについては改↗

方々のご好意によってその出版が可能になった。したがって，まずは『青年小泉信三の日記』の意義について若干述べておくことが必要であろう。

筆まめな小泉のことであれば当然だが，生前の小泉にも初回の留学，遊学について言及したものがある。まずあげなければならないのが，『慶應義塾学報』に寄稿した三回続きのエッセイであろう。「英京雑事[3)]」と題したものがそれで，1913年の5月，9月，そして12月に公刊されている。本稿との関係でもっとも重要なのが，初回5月に掲載されたものである。ここで，小泉はLSEを中心として自らが聴講した講義，演説などについてふれている。LSEでのキャナン，フォックスウェル，ウェッブの講義のほか，学生主催の演説会に招かれたショーの演説についても言及されており，それぞれについて小泉の所感が記されている。小泉が聴講したキャナンの講義についてはそれがスミス以降を対象にしたもので，それ以前の時期については前の学期で講義の対象となっていたことが「英京雑事」には記されている。また，フォックスウェルの講義との関連で，義塾図書館におさめた『国富論』，『リカードウ全集』がミュージアムブックストアで購入されたことも明らかにされている。

ドイツ滞在時の所感も残されている。たとえば，1925年5月に『改造』に寄稿した「開戦当時のベルリン日記[4)]」が一例である。これは，第一次世界大戦前後の小泉の日記を紹介したもので，全体として文語調で書かれている。期間も限定されたもので，1914年7月21日から8月15日までを扱っている。執筆にあたっては，これまでは未公刊であった『青年小泉信三の日記』の一部を利用した可能性があろう。さらに，第二次世界大戦後に書かれた「私の履歴書」でも留学時代についてかなりの紙幅が費やされているのである。

これらはいずれも重要な情報であり，これから扱う『青年小泉信三の日記』をある意味で補完するものであろう。それにもかかわらず，今般の日記の公刊が意味を持つのは，日単位で小泉の行動がフォロウできること，そして小泉の集書のプロセスや聴講した講義についてさらに詳しく知ることができることによる。こうした詳細な情報は，今回の日記の公刊によってはじめて可能になったといってよい。また，『青年小泉信三の日記』は1911年の元旦をもってはじまっているので，渡英，渡欧前の東京での小泉の生活についても貴重な情報源である。

拙稿は，イギリスに足をふみいれてから第一次大戦勃発時までの小泉の行動を『青年小泉信三の日記』によって追跡したものである。とくに，聴講した講義，集書の過程，そして開戦直前，直後

↘めていない。今日時点からすれば違和感がある当て字や，ぶれがある人名表記についても同様である。また，本稿では，本文中の諸文献からの引用にかんしては本文にページを含めた出典を記す。年号の指示は西暦による。

3)　小泉信三全集，第26巻所収。小泉の著書，論稿についてはとくに断る場合を除き，文藝春秋社版の全集に依拠する。このさい，小泉信三全集への言及，あるいはそこからの引用については，たとえば小泉全集　1：○○ページとする。他の諸文献については，Robbins (1997), p. ○○というように表示する。

4)　小泉全集，第12巻所収。

のドイツでの体験に焦点があてられている。

2．イギリス滞在

2.1　LSE での講義

上海，香港，シンガポール，スエズ，マルセーユを経由して，小泉は1912年11月７日にロンドンに到着した。翌年，１月９日，授業料を払うべくはじめて LSE を訪れている。

> 午後経済学校に授業料を払いに行く。キアナンの「経済学説」（高等講義）を傍聴しようと思って申込んだが，これはキアナン教授の承諾が得なければ聴く事が出来ないそうだ。次の火曜に行って逢うつもりだ。ウェッブの研究会も同様。フォックスエルの銀行通貨論の分十二志六片を払う。ブリチシュミュージアムでキアナンの新著 Economic Outlook をのぞく。結論には自伝が書いてある。一寸気障だけど面白い。「議会に於けるリカード」などと云う論文が載っている。面白そうだが時間がなくって読めなかった。（日記：317ページ）

小泉の滞英時にはキャナンは五十歳台であり，LSE の重要人物の一人であった。小泉の日記にはしばしば彼の名前が登場している。上記の引用が示しているように，小泉は彼の Economic　Outlook に関心を持ったようだ。

LSE の講義それ自体の描写は，1913年１月14日の記載をもって始まっている。以下，キャナン，フォックスウェルの講義についての印象である。

> 初めて倫敦大学へ出てキアナンとフォクスエルの講義を聴いた。学校の建物は非常に汚い。生徒の数もごく少ない。キアナンの講義は「生産分配論史」をもとにしたものである。弁舌は頗る悪い。「アー」とか「ウー」とか引っ張るので聴き苦しい。顔はエドワード七世に非常によく似ている。一時間聴いているのはかなり忍耐を要した。キアナンの特別クラスと云うのに出席を許して貰おうかと思ったが，これは講義ではなくディスカッションである。講義は今やったのが最高のものだと云うから，それではと思って特別クラスの方は止めにした。フォクスエルの銀行通貨論はさらに聴講者の数が少ない。フォクスエルと云う人は頗る学者的な顔をしている。この顔は写真にウツスと非常に立派に見えるのだと思いながら眺めていた。講義は英国通貨史の歴史で，ギニーの価値に干する政府の政策を述べ且つ評していた。この辺のことは忘れてしまっているから一寸聴いただけでは分らない。（日記：318ページ）

ここで小泉が言及しているキャナンの著作のフル・タイトルは『1776年から1848年にかけてのイギ

リス経済学における生産と分配の歴史[5)]』というもので，1893年に刊行されている。すでに「英京雑事」でもふれられていたが，キャナンの講義は，スミスを含めてそのあとのイギリス古典派経済学の展開をたどったもので，「『生産，分配学説史』の摘要に過ぎない」（小泉全集　26：28ページ）とも言われている。小泉はイギリスにおいてはじめて同書に接したわけではなく，1911月２月２日の日記では「キアナンの『生産並びに分配の理論』は流石に精透な頭脳を以って書かれてある」（日記：17ページ）と賞賛しており，すでに日本にいるときから同書を読んでいたことがわかるのである。

明らかに，小泉はキャナンの講義スタイルには魅了されなかったようで，「弁舌は頗る悪い」と手厳しい。キャナンが少なくとも入門者にとっては必ずしも良い話し手ではなかったことは事実で，キャナンの門弟の一人であるライオネル・ロビンズはつぎのような感想をもらしている。

> ともかくも通常の意味では，彼（キャナン）は確かによい講師ではなかった。王立経済学協会の会長講演が示しているように，彼はそのつもりになれば，大変明瞭なそして人気のある講義を行うこともできた。しかしながら，通例の経済学原理についての講義はこのような質のものではなかった。キャナンの声はつねによく聞こえたわけではない。彼の講義は流暢なものではなく，しかもぼそぼそつぶやく癖があった。このような癖のせいで，最初の二列に座っているのでなければ，講義の一部分，しかももっとも重要な一部分が聞こえなくなってしまうのだ。かてて加えて，講義は初学者の便宜にとってよく配列されているとはいえなかった。（Robbins (1997), p. 327）

このように，キャナンの講義スタイルに関する限り，ロビンズの印象と小泉のそれとは大きく隔たるものではない。それにもかかわらず，学問的には『生産と分配の歴史』は小泉にとって重要な著作であった。さきの日記での論述に続き，つぎのような叙述が見出される。

> 家に引っ込んで読書。Cannan, Theories of Production & Distribution と Humphrey, History of Labor Representation を読む。（日記：320ページ）

---

5)　本文で言及した『1776年から1848年にかけてのイギリス経済学における生産と分配の歴史』であるが，その第２版が彼の蔵書には含まれており，現在は慶應義塾大学図書館所蔵となっている。請求記号，経　小泉　14。小泉の蔵書の一部は，慶應義塾大学図書館に寄贈された。しかしながら，これは膨大な小泉の蔵書の一部である。和書は含まれていないし，洋書についても戦災で失われた場合が少なくない。以下の所蔵調査は『小泉信三文庫目録』にしたがっているが，このような限界があることをあらかじめ明記しておかなければならない。目録に含まれていなくとも，小泉の蔵書にはなかったという証明は困難だということである。

キャナンと並んで小泉の日記にしばしば登場するのがフォックスウェルだが，彼との会話について記したつぎの部分は引用に値するであろう。

> 時間が済んだあとフォックスエルに質問をして見た。フォックスエルは長者の風があると思った事の誤りでなかったことを確めた。メンガーの「労働全収益権論」の序文に干して尋ねた処が，所要の質疑に充分満足すべき答えを与えた後，「あの本（英訳）は絶版になっているから大変高い。ブリチシュミュージアムの前の本屋に一冊あるのを知っているが十七志ぐらい取るだろう。矢張り方々聞いて歩いて一番安い家で買うのが一番好い。（その本屋はミュージアムブックストアですかと云う問に答えて）否，あの家ではない。あの家は暴利を貪るからいけない。あれは波蘭猶太人でヒドイ欲張りだ。僕は一度ひどい目にあった事があるから recommend しない」云々。それからもし買うならばケムブリッヂの或本屋に聞いてやろう。それからもし独乙の本を買うならばグレイプ街の Müller いう家が好い。彼は自ら立派な経済学者でその方面にかけて立派な素養を持っている。などと云うことを話してくれた。キアナンがイヤに苦虫を噛みつぶしたような顔をしてソッ気ないのとは非常な違いである。学問もキアナンに比べるとフォックスエルの方が余程上ではないかと思われる。経済学の古本渉りはキアナンの生命とも云うべきだが，この種の渉猟穿鑿も或はフォックスエルの方が上ではないかと思われる。英訳「労働全収権」に添えた序文は善くこれを証明している。（日記：339-40ページ）

アントン・メンガーの筆になる『労働全収益権論』[6]は，小泉のお気に入りの著書の一つであった。ドイツ語の原典は1886年に公刊されており，ここで話題になっているフォックスウェルの序文付きの英訳は1899年に出ている。小泉は早くも1912 年12月 4 日に，イギリス滞在中大変懇意にしていた銀行家，巽孝之丞から英訳を借りている。巽は横浜正金銀行ロンドン支店長で，当時の巽邸は小泉や，彼の親友であり後に親戚ともなる阿部章蔵など日本人留学生の溜まり場になっていた。日記には，12月30日にブリティッシュ・ライブラリーで同書を読み終えた由，記されている[7]。後年，小泉の関心が社会思想史の方面にも広がっていったこと，そして長年にわたり社会思想史の講義を続けたことを考えると，メンガーの『労働全収益権論』にたいする彼の強い関心には頷けるものがある。

ところで，上記の引用では，小泉はキャナンよりもフォックスウェルを高く評価している。両者の学者，研究者としての力量を比較，評価することは困難であろう。ここで問題になっている資料的な側面からなる経済思想史研究という面に限っても，キャナンは『国富論』の編者であり，現在

6）『労働全収益権論』については，ドイツ語版第 3 版が小泉の文庫の目録には記載されている。請求番号，B366.02 M1 1。

7）日記：311ページ。

でも彼が施した注記は利用されている。しかしながら，元来『国富論』の校訂本を出版するという計画はフォックスウェルの企図したものであって，これが実らなかったためにキャナンにお鉢が回ってきたという事情もある。フォックスウェルはその蔵書でもよく知られている。晩年には書物よりも書店のカタログが好きになってしまったというフォックスウェルだが，この時点では彼はおよそ三万冊に及ぶ蔵書をすでに売却済みであり，後にハーバード・ビジネス・スクールに売却することになる第二次の蔵書構築を始めた段階であった。[8] 上記の引用では，彼がロンドンやケンブリッジの古書店についてファースト・ハンドの情報を有していたことが示されている。小泉もふれている『労働全収益権論』英訳本に付した彼の序文はよく知られており，また経済・社会思想史研究者としてのフォックスウェルの力量をいかんなく示すものであろう。

他に小泉が在英時に出席した講義としては，シドニー・ウェッブのものがある。3月5日の授業について，小泉はつぎのような所感を記している。

> 夕方からウェッブの講義をききに出かけた。救貧法政策三回講義はこれでお仕舞いになったのである。ウェッブという学者は実に信頼するに足る学者である。その知識の正確該博なると，政策問題の実際に通じている点に於ては，世界屈指の人であろう。その代り思想家ではない。酷評すれば知識あって思想なき学者と云える。（日記：332ページ）

ここでも，小泉のイギリス人学者評価は手厳しい。ウェッブがはたして「思想なき学者」といえるかどうかは議論の余地があろうが，彼が実際の経済のディテールに通じた博引傍証の人であったことは疑いえない。その限りでは上記の小泉の評価は当たっている。このほか，小泉はスコットランド出身のウィリアム・カニンガムの講義に接している。そして，1913年11月末にドイツに旅立っている。

ここで，小泉が聴講した講義について若干のまとめをしておきたい。それとともに，これらの講義が小泉の後年の思想の展開にとってどのような意義を有するかについても考えてみたい。

全体として，小泉がLSEで接しえた講義は経験主義的なにおいがするものが多い。ジェボンズやワルラスの奮闘にもかかわらず，経済学はいまだここでは数理科学ではなかった。制度化される以前の経済学がなおも講じられていたのである。キャナンは，高級な経済理論よりは健全な常識に力点を置くタイプの学者であった。また，フォックスウェルとマーシャルの経済学的な立場の相違は明らかであった。誰にも知られていないようなパンフレットの収集にかける情熱は，マーシャル的な見地からは理解しがたいもので，科学の名には価しないのであった。フォックスウェルが事実の正確さを期したのにたいし，マーシャルの本業は，彼がいかに高く歴史的な研究を評価していた

8）　ここでは，フォックスウェルにかんしてはつぎのものによった。Keynes (1933), Chapter 17, 邦訳，第17章，Ebenstein (2004)。

としても，分析と推論にあった。

経済史研究の意義にかんしては，カニンガムとマーシャルの間で熾烈な論争がおきた。マーシャルにとっては細かい史実を扱う中世史研究は退屈きわまりないものでしかなかった。他方，マーシャルのケンブリッジ大学教授就任にも怨恨を持っていたカニンガムは，マーシャルを経済史家としては失格だとしている。ちなみに，この論争にかんしては，フォックスウェルはカニンガムを支持している。

1908年，ピグーがマーシャルの後継者としてケンブリッジ大学の経済学講座の教授に就任する。このためにマーシャルがさまざまな運動を展開したことはよく知られていよう。ピグーの教授就任は，フォックスウェルに大きな落胆をもたらした。これ以降，ケンブリッジの学風は理論への傾斜を深めていくことになり，経済学の制度化はケンブリッジでも進展することになる。[9)]

このように，後継者としてピグーを選んだマーシャルと，カニンガム，フォックスウェルの立場の相違は明らかであった。結果からみれば，小泉がイギリスで聴講した講義は，そうした意味で反マーシャル連合の観を呈していたともいえる。理論的なあるいは分析的な講義は含まれていないのである。一つには留学先の場所の問題がある。すでにピグーはケンブリッジ大学の教授であったので，ケンブリッジでは経済理論は明らかに新しい段階に入りつつあったといってよい。だが，小泉が当座選んだのは LSE であった。小泉自身が，この段階ではケンブリッジの経済学よりも LSE のそれを高く評価していたこともまた事実なのだ。

後年，小泉は理論経済学者として大をなすが，他方で経済思想史・社会思想史研究者としても知られていくことになる。経済思想史・社会思想史研究者としての小泉にたいしては，イギリスやドイツで聴講した講義が多くの知見を与えることになったであろう。とくに古書の集書や選書については，たとえばフォックスウェルの講義や日記でもその一部が再生されている彼との会話は，得るところが大きかったと思われる。ただし，上記のウェッブにたいする見解からもうかがい知ることができるが，小泉は知識や史実の断片を並べればそれでよいとするタイプではなかった。ウェッブにたいする「知識あって思想なき学者」という評価はこのような小泉の立場をよく示している。たとえばマルクスなどにたいする――後年の小泉の思想の展開が明示しているように，もちろん批判を排除するものではない――愛好は，グランド・セオリーにたいする愛好でもあった。この点，体系的な知識にたいする好みはすでに強く感じられるところであり，本節で登場した経験主義的な知のあり方をそのまま小泉が継承したとは考えにくい。

2.2　ジェボンズ『経済学の理論』の訳者としての小泉

よく知られているように，小泉はジェボンズ『経済学の理論』の訳者として学界にデビューした。

9)　フォックスウェル，カニンガム，そしてマーシャルの間の複雑な関係については，Nishizawa (2002) の歴史的描写に依拠した。

福田徳三のきわめて高い小泉評価によって，本訳書は若き学者としての小泉のポジションを不動のものにしたといっても過言ではなかろう。翻訳は，小泉のイギリス滞在時に刊行され彼の手元にも届いている。この関係で，小泉はジェボンズの息であるハーバート・スタンレー・ジェボンズとの接触を試みている。

小泉が子息ジェボンズとの接触を考えたことの背後には，版権，翻訳権の問題があった。1月27日の日記にはつぎのような記載がある。

> ミュージアムへ勉強に行く。傍らジェヲンス翻訳の事に就き版権所有の期限の事を調べたけれども要領を得ず。この上はジェヲンス息子に手紙を出すより外はないと決心した。（日記：325ページ）

この間小泉は『経済学の理論』の版元であるマクミラン社に書簡をしたためたようで，翌28日には同社からの返信を受け取ったことが日記に記されている。

> 阿部章蔵君，高橋正平君，スケーチングの教師，マクミラン社等から手紙もしくは葉書。マクミランのはジェヲンスの宿所を尋ねてやった返事である。御用があるなら喜んでお取次ぎするとばかりで肝心の宿所は知らして寄こさない。（日記：325ページ）

何通かの私信とならんで，日記はマクミラン社と小泉との書簡のやりとりについてふれている。実際のところ，これ以降，どのようなやりとりがマクミラン社と小泉，あるいはジェボンズ本人と小泉との間にあったかは日記の限りではわからない。ただ，2月1日にはジェボンズあての書簡に関連して前記の巽を訪問しているが，このおりは巽が不在だったので目的を達成できなかった。[10)]

つぎにこの件が日記に登場するのは7月8日であり，この日に小泉はジェボンズから「二度目の手紙」（日記：383ページ）を受け取っている。翌々日にナショナル・リベラル・クラブで落ちあえないかとの提案がジェボンズからあった。翌9日，ジェボンズとの会見に備えて小泉はシルク・ハットを購入している。[11)] そして，いよいよ7月10日の会見日を迎える。いささか長文にわたるが，当日の日記から引用してみよう。

> 入口から忙しそうに入って来たのがプロフェッサー　ジェヲンスである。この記事はジェヲンスの風采態度の描写を以って終りとする。一言にして云えばジェヲンスは田舎者である。頭がハゲて頬とあごとに不精鬚が生えている。白髪がチョイチョイ交じっている。荒い縞のしかし

10）　日記：329ページ。
11）　日記：383ページ。

スマートではないゴワゴワした衣物を着て，手には白パナマ帽を鷲づかみにしている。眉毛は太い。而して目には如何にも愛嬌があって笑うと小児のような表情をする。会う前には少し心配で何と云って口を切ろうかと考えていたが，会って見てすっかり安心した。……中略……僕はジェヴンスと一緒に昼飯を食った。ジェヴンス（父）とマーシャルとの干係，並びにジェヴンスが早逝しなかったらどうなっているだろうと云うような問題に就いて話をした。ジェヴンスに会った時，自分は早速思った。この人の態度風采に現われる質素，着実，並びに無骨は，技師に共通な型だと。ところがこの直覚が正しかった事は直に知れた。彼ははじめ自然科学を修め，独乙遊学も地質学研究の為めであったと云う事だ。シドニイの大学でも地質学を教えた。経済学は校外講義としてはじめて試みたのだと云う。「おやじの経歴と同じようなものです」と云った。豪州から日本，亜米利加を経て帰国し，エールス大学で経済学を講じたが，今の仕事が忙しいのでとうとう断ってしまった。今の仕事と云うのはガーヂフ（ママ――引用者）の市外に庭園村を作る事である。彼はこの会社の支配人なのである。（日記：384-85ページ）

上記の小泉のジェボンズ・ジュニアについての描写は，ほぼ事実に即しているといえる。ハーバート・スタンレー・ジェボンズは，限界革命の立役者であったウィリアム・スタンレー・ジェボンズの子息であり，ハイデルベルクで地質学を学んだ。1902年から1904年にかけて，彼はシドニー大学で鉱物学と地質学を教えた。イギリス帰国後は，カーディフにある南ウェールズ・マモスシャー大学で教鞭をとっている。こうした略歴の紹介でも知られるように，彼は父と同様元来は自然科学の素養を持った人であり，これも奇しくも父と同じくオーストラリアにいた経験を持っている。『太陽熱と交易』（1910年）等の著作があり，後にインドに渡りかの地での経済学の発展に大きく寄与した。現在まで続く『インディアン・ジャーナル・オブ・エコノミックス』の創刊にも関与している。[12)]

父ジェボンズとマーシャルとの関係が，会話の主題になったのは不思議ではない。マーシャルの『経済学の理論』にたいする書評は基本的には冷ややかなものであり，しばしばそういわれるように，そこには両者の古典派経済学にたいするスタンスの違いが反映されていた。ジェボンズには経済学の革新者だという自負があったし，マーシャルには古典派経済学にたいする深い畏敬の念があった。46歳の若さでジェボンズは溺死するが，彼の早世も子息と小泉との間で話題になったことを日記は伝えている。

12） 以上，ハーバート・スタンレー・ジェボンズについては Tomlinson（2004）による。

2.3　書物を求めて

小泉のイギリス体験の看過できない側面として，書物あさりがある。価格だけからみればあるいは今日よりも恵まれていたのかもしれないが，オンライン・ショッピングももちろんなく，彼我の間の移動が今日よりも困難だったことを考えると，留学生が書物をもとめてあちこちの書店を訪れたのは当然なことといえる。小泉も例外ではなく，古書や新刊書を求めてロンドン各所の書店を訪れている。

1912年11月15日には，タイムズ・ブック・クラブをおとない，マックス・シュティルナーの著書『唯一者とその所有』を注文している[13]。よく知られているように，同書は若きヘーゲリアンに大きな影響を与えた。その衝撃の大きさはシュティルナー・ショックとも言われており，若き日のマルクスたちもその影響下にあった。原典はドイツ語だが，小泉が注文したのはその英訳本である。実は，同書についてはこれに先立ち８月に日本で入手できる可能性があった。丸善の新聞広告を見た小泉は，丸善にすぐに出向くがあいにくすでに売り切れていた。８月10日の日記には「どうしても思い切れないので，万一を頼りに中西屋までわざわざ出かけたが無論無駄だった。一日中癪に触って仕方がなかった」（日記：224ページ）と記し，憤懣やるかたない様子である。同書は小泉にとっては念願の書の一つであった。

小泉が頼りにしていたのはタイムズ・ブック・クラブだけではない。日記にしばしばあらわれるのが，古書店ヘンダーソンである。12月24日の記載を見てみよう。

> チェアリングクロスロードの例のヘンダーソンでサフラジェットの画葉書と K. Marx, Value, Price, & Profit（3£）を買った。これはマルクスの経済学説を最も簡単に述べたものである。こっちへ来るとこの種のパンフレットを手に入れる事が出来るのは便利である。（日記：308ページ）

『価値，価格，利潤』は小泉も述べているように，マルクスの思想をきわめて簡潔な形で要約したものである。ここで問題になっている英語版は1897年に刊行されているが，『賃金，価格，利潤』とのタイトルを持つドイツ語版は翌1898年に出ている。小泉が無政府主義者，クロポトキンの著書もヘンダーソンで購入したこと，つぎの記載にやはりみえている。

> 昨日書くのを忘れていたが，昨夜ミュージアムの皈り例のヘンダーソンに寄って Kropotkin, Appeal to the Young を買って電車の内で読んだ。現在社会の欠陥を指摘して青年の感情に訴えたものとして今まで読んだものの中で一番よく書けている。しかし肝心の社会主義の主張に

13）　日記：281ページ。

就いては何も云ってない。来たりて吾等社会主義者の間に投ぜよと云うばかりで，社会主義者は何をなすべきかと云う事については何も云っていない。（日記：326ページ）

先の引用でもそうであったが，引用のなかで「例のヘンダーソン」という言い方を小泉はしている。これは，彼がかなり足しげくヘンダーソンに通っていたことを意味していよう。上記の引用では，同時に社会主義にたいする小泉の批判もみえている点，興味深い。

ヘンダーソンに通う過程で，小泉はあるドイツ人社会主義者と遭遇するに至る。1913年３月18日付けの日記はこの遭遇について語っている。

ロンドン大学を出てチェアリングクロスロードの古本屋を冷やかしながら，例のヘンダーソンに寄ってベルンシュタインの「発展的社会主義」を注文して皈ろうとすると，親爺がどうだこれを買わないかと云って見せたのは，古い独乙の雑誌（新聞？）を綴じたものである。„Republik der Arbeiter“ としてある。年代は一八五一年で発行者 Weitling としてある。Weitling がかかる雑誌を発行していた事は記憶には止まっていない。しかし独乙本国では発行出来ないので紐育で出したなどと云う事は覚えがあるような気がする。いくらだときくと一ポンドだと云う。少し高いけれども，買いたい事も買いたいので迷っている処へ入って来た一人の大男が「どれ」と云いながら頻りにヒネクリ廻して買いそうな態度を示して「党に知らして買わせよう」などと云っている。（日記：340ページ）

ここで話題になっている『労働者共和国』（Republik der Arbeiter）は，ヴィルヘルム・クリスチャン・ヴァイトリングの編集になる雑誌である。小泉が推測しているようにニューヨークで公刊されていたもので，1850年に公刊が始まった。手工業職人のヴァイトリングは1846年末に新大陸に渡ったが，48年革命勃発のさいにはドイツにもどっている。本誌は，二回目の渡米後に発刊されたもので，さしあたりは月刊で発行されていた[14]。小泉が社会思想，あるいは社会主義思想に強い関心を抱いていたことはすでに書店側にはわかっていたようで，だからこそ「買わないか」と持ちかけてきたのであろう。もっとも，この時点での小泉のヴァイトリングにたいする興味は積極的なものではなかったようで，その名前を記憶していたものの，『労働者共和国』とヴァイトリングは小泉の頭のなかではかならずしも結びついていなかったようである。

この引用に登場する人物は，ユリウス・ケットゲンという名のドイツ人で，当時ドイツ社会民主党の機関紙である『前進』のロンドン通信員であった。彼がヴァイトリングの『労働者共和国』に興味を示していたことは，当時のドイツ社会民主党員の広範な関心を物語るものであろう。やはり

14）　ヴァイトリングについては，ここでは石塚正英（1998）によった。

同日の日記に記録されている小泉とケットゲンとの間の会話はきわめて興味深いものである。以下，日記上で再生された二人の会話である。

> 彼，余は日本に遊ばんと欲す，日本語は左して困難なりと感ぜず。日本の社会主義運動は如何。
> 余はカタヤマ氏の名を知れり。
> 余，カタヤマ氏よりもサカイ氏の方優れた社会主義なり。彼はマルクスを祖述する純粋なるMaterialistなり。失礼ながら足下はベルンスタイン，カウツキーいずれに味方し給うや。
> 彼，カウツキーなり。余は純然たるマルキシストなり。（日記：341ページ）

十分ではなかったかもしれないが，この時点でも小泉はドイツ語を解したと考えられるので，かれらの会話が英語で交わされたのかあるいはドイツ語だったかは不明である。当然のことながら，日記上では上記のように日本語でその会話が再生されている。ケットゲンが「日本語は左して困難なりと感ぜず」とした根拠はわからない。すでに若干の日本語の知識があったのか，あるいはたんなる印象として難しくはないはずだ，という程度なのか。ここでの会話は見られるように，日本での社会主義運動が主題になっている。社会民主党員としてのケットゲンはおそらく日本での社会主義のあり方に関心を持っていたのであろう。片山潜の名前はすでに彼の記憶するところになっていた。これにたいして，小泉が，片山潜よりも堺利彦を高く評価しているのは面白い。

小泉は個人として本を買っただけではなく，慶應義塾図書館のために，つまり公的な立場としても選書することがしばしばであった。当時はもちろん現在に比すれば，洋書の入手はそれほど簡単ではなく，ヨーロッパやイギリス滞在中の留学生が集書に利用されたことは『慶應義塾図書館史』もふれるところである。[15] 小泉はこうした目的のためにも，さきのフォックスウェルとの会話にでていたミュージアムブックストアを利用した。[16] つぎにあげる堀江帰一あての書簡には，塾あてにこの書店の目録を送付したことが記されている。書簡は年賀の挨拶をも兼ねたものである。

15）『慶應義塾図書館史』はこの間の事情についてつぎのように述べている。「またこの頃は洋書の購入を留学生に依頼することが屢々あった。第一次大戦のとき各国政府の公文書類を収集するため，大正二年出発の小林澄兄にそれを依頼したが，専門外でわからない。ロンドンで三辺金蔵に遭い，頼んだらそれらと共に会計学の図書も多く買って田中監督に渋い顔をされたそうである。留学生による事後承諾の図書購入は三辺のみでなく，早くは神戸寅次郎などにもあって，評議員会で釘をさされたこともあった。欧州大戦中は洋書の入手が困難で，殊に独逸書の輸入は官立学校に限られていたから，留学生の活用が盛んに行われた。」（慶應義塾大学三田情報センター編（1972），90-91ページ。）

16） 小泉は，義塾図書館所蔵の『国富論』がミュージアム・ブックストアから購入されたとしている。これは興味深い情報だが，『国富論』のどの版，どのコピーであるかはこれだけではわからない。ところが，義塾図書館所蔵の『国富論』第3版にはミュージアム・ブックストアの蔵書票があり，実際にこのコピーについては入手経路が判明している。請求番号，E15 9 3。付せられている蔵書票には住所も記されており，書店の住所もあわせて判明する。つぎのものがそれである。“SUPPLIED BY THE MUSEUM BOOK STORE, 45 MUSEUM STREET, LONDON, W. C.” なお，つぎの注をも参照のこと。

恭賀新年。御手紙難有拝見致候。博物館ブックストアの目録は塾宛にて送らせ置候。珍しきも［の］なかなか多く目移りして撰拓の力を失ひ候。（小泉全集　25上：38ページ）

序で紹介した「英京雑事」では，高いが品揃えがよいのでミュージアムブックストアは外国人には便利だとしている。[17] 堀江は小泉の師の一人だが，彼自身イギリス滞在時にこの書店から書籍を購入しており，慶應義塾図書館の蔵書構築に役立てていた。したがって，ミュージアムブックストアについては小泉自身も日本にいたときからその存在を知っていた可能性が高い。後年，小泉は慶應義塾図書館監督となり，さらに図書館の蔵書構築に貢献することになる。

3．ドイツ滞在

3.1　ベルリン大学とドイツ歴史学派

グスタフ・シュモラーに率いられたドイツ歴史学派は，第一次世界大戦直前のこの時期にあっては，まだ大きな影響力を持つ学派であった。したがって，ドイツに勉学の場を移した小泉がシュモラーの講義に出席しようと考えたのはごく自然であった。1913年11月25日の日記には，以下のような記載がなされている。ちなみに，冒頭で名前が出ている「三辺」は小泉と同じく塾の教員となった三辺金蔵を指す。カフェヴィクトリアはしばしば小泉たちが訪れたカフェのうちの一つである。

カフェギクトリヤで三辺君と待合わし，シュモラーの講義を聴きに行った。シュモラーの講義を聴く心地は一昨年初めて文楽に摂津大掾を聴きたる時と同じ心地である。摂津大掾の義太夫が上手であるか下手であるかと云う事は問題にはならない。ただ文楽で摂津を聴いたと云う事のみが価値があったのである。シュモラーの著書も学説も格別自分に取っては親しみのあるものではない。ただ伯林大学の講堂にシュモラーを見たと云う事だけが価値あるように思われる。自分は伯林に行く前にシュモラーが死んで仕舞いはせぬかとしばしば恐れた。今日講堂の前の方に坐っていて，白髪白髯のフロックコートを着た老教授が入って来るのを見た時には，自分はただまあ好かったと思う心が念頭を支配した。これでまずシュモラーを見ることも出来たと安心したのである。講義の主題は階級分立と階級争闘と云う事であったが，その意味は無論殆

17）「英京雑事」ではつぎのように述べている。「塾の図書館に国富論原版，リカアド全集等を納めたMuseum Book Storeはフォ氏には信用がない。『かの主人はポーランドユダヤ人で，自分は一度ひどい目に合されたことがあるから人には推薦しないことにした』と云うのである。成程彼れの店は貪るようである。しかしながらロンドン土着の者ならば知らず，日本から注文する場合などにはやはりstockの多いこの家に命ずるのは止むを得ないことと思う。」（小泉全集　26：29ページ）このように，本稿2.1における日記からの引用と「英京雑事」での記載はかなりの程度重複している。

ど全く聴き取れなかった。講義の口調は明晰でゆっくりしている。これならば慣れさえすれば書き取れるかと思う。（日記：432ページ）

小泉にとってドイツ歴史学派とこの学派の泰斗シュモラーは格別の学問的な関心事ではなかった。[18] 彼自身，上記の引用で告白しているとおりである。小泉の主たる興味はイギリス古典派やマルクス，またそれに至るあるいはその周辺の社会主義思想史であって，ドイツ歴史学派それ自体に魅了されることはこれ以降もなかったはずである。師である福田徳三の事例などとは異なり，肯定的にせよ否定的にせよ小泉と歴史学派との関係性はうすい。であるにもかかわらず，小泉はシュモラーの講義を聴講した。彼にとってシュモラーは「摂津大掾」のようなものであったと，彼らしい表現をしている。とりあえず見ておこう，聴いておこうという対象としてシュモラーがいたということであろう。同時にこのような評価は，当時においてシュモラーやドイツ歴史学派がまだ燦然と輝く星であったということを意味している。国籍を問わず，当時シュモラー詣で，ワーグナー詣でをした留学生はあまた存在したが，小泉も極東の国からきたそのような留学生の一人であった。

小泉がベルリンで聴講したのは，シュモラーだけではない。数日後の日記には，シュモラーの同僚だった二人の経済学者の名前が登場する。

まず第一にオッペンハイマーの「社会主義史」に出た。オ氏は年が若いのだかふけているのだか見ただけでは解らない。髪の毛が白くなっているところは老人らしいが，音吐朗々して元気の旺んな事はどうしても少壮学者の風が見える。まだ私講師だから若いのが本統だろう。……一旦かえって出直し，晩にはワグナアの「資本主義と社会主義」を傍聴した。声が徹らないものだから学生は皆講壇の下に佇立して聴くのである。僕には何の事か分らなかった。（日記：437ページ）

フランツ・オッペンハイマーはベルリン大学の正教授ではなかったが，同大学のアクティブな研究者の一人であった。日記にも記載されているように，在独中に小泉は個人的にオッペンハイマーの私邸を訪ねることになる。のみならず，ゆえあって第二次世界大戦中，二人は日本で再会することになる。イギリスやドイツで出会った学者のなかで小泉と個人的に交際が続いた例は少ないが，オッペンハイマーは顕著な例外である。また，アドルフ・ワーグナーはベルリン大学におけるシュモラーの同僚である。シュモラー，ワーグナーは並び称せられるが，方法的にはワーグナーはドイツ歴史学派とはことなったスタンスをとっているので，この学派に含めて考えられるかどうかは疑問である。財政学での貢献が一般にもよく知られていよう。

18） もっとも目録の限りでも，ドイツ歴史学派についてはかなりの点数が小泉の蔵書には含まれている。少なくとも，シュモラーについては5点，ゾンバルトについては7点が蔵書に収められている。

ベルリン滞在中の日記においてしばしば登場するいま一人の学者が，ヴェルナー・ゾンバルトである。ゾンバルトについての最初の記載は，1913年12月９日付けの日記に見られる。

> ゾムゾルトは文章を読むと絢爛を極め過ぎて気障でいや味だが，会って見ると著書を読んだ時の印象が全く覆えされる。猶太人の特徴とも見るべき沈痛の表情がある。声なども盛んに抑揚すると云う方ではない。頬に髯が生えて目は窪んでいる。富豪の子だと云うのに質素な地味な風をしている。縞のシャツを着ているところが「近代資本主義」の著者らしくない。講義は近世の始め新大陸の発見，西，仏，葡，英の殖民競争の辺まで来ている。聴いていて分ったのはこれだけである。（日記：439ページ）

学位取得後，ゾンバルトが教鞭をとったのはブレスラウ大学においてであった。十六年間そこで教え，1906年にベルリン商科大学に正教授として着任する。1917年にはベルリン大学に移るが，この時点ではまだベルリン商科大学で教えていた。小泉もそこまで出向いてゾンバルトの講義を聴いたことになる。1902年に公刊された『近代資本主義』の著者としてゾンバルトは学生の間でも人気があった[19]。例によって，観劇好きの小泉にふさわしく，接しえたドイツ人学者の描写は細かい。

小泉は，ベルリン滞在中ゾンバルトの講義にも出席し続ける。ドイツ到着の時点では，小泉のドイツ語能力は英語に比すれば限界を有していたが，おそらくは当時受けていた個人レッスンにもより，後には講義の大半を理解するまでに進歩している。当時の日記には勉学のためか，ドイツ語での直接の記述もあり，ドイツ語学習にかける小泉の熱意が感じられる。1914年１月の日記にはつぎのように書かれている。

> シュモラーの講義はまだ始まらなかったが，ゾムバルトの方は始まった。ゾムバルトの講義が殆ど半分位分ったのは嬉しかった。まず僕の独乙語もこれだけ進歩したのである。（日記：452-53ページ）

3.2　開戦，そして再びイギリスへ

オーストリア皇太子がセルビアで暗殺された1914年6月28日，小泉はベルリン郊外でプロのテニス選手とテニスに興じていた。テニスコートの管理人が，号外を携え仰天した面持ちで小泉のもとに駆け寄る。

> その夕べ，私がゲエムをしていると，コオトの管理人兼食堂の亭主である中年男が，新聞号外

19）　ゾンバルトの生涯については，Lenger（1994）が詳細な論述を与えている。

を手にして駆けて来て，「ドクトル，大変だ。戦争になる」と叫んだ。その時は誰れも本気にするものはなかったが，実はこの男の直感が当たっていたのです。独身で，身軽な外国留学生よりも，妻子や業務に対する責任を負い，陸地つづきの敵国の恐ろしさを知るこの男の方が，遥かに真剣に問題を考えていたのでしょう。（小泉全集　16：480ページ）

小泉の述懐によれば，彼自身を含め，この日の出来事が大戦につながると考えた人はほとんどいなかったとのことである。実際，この日の日記には「午後テニス。一月振りである。ヘトヘトに草臥れた」（日記：512ページ）とやや暢気な記述が残されているだけである。上記の引用は後日書かれた「私の履歴書」からのものであるが，これはあくまでその後の開戦をふまえた書き方になっている。実際のところ，残された日記からは開戦への危機感を感じとることはできない。また，以降の日記による限りでも，戦争への予感を感じさせる記述はない。小泉は当時ドイツの新聞，雑誌などのメディアにかんしても細かくフォロウしていたので，これはドイツ国内での一面では楽観的な見方を反映しているのかもしれない。

7月25日の記述では，オーストリアのセルビアへの最後通牒について記されている。三日後の28日，小泉はゾンバルトの講義を聴講してから社会民主党の反戦演説会に出かけている。

社会党の非戦示威演説会が市の内外二十何個所で催された。ゾムバルトが済んでからその中の一を弥次りに行って見た。……ウンターデンリンデンへ来て見ると素敵な騒ぎだ。騎馬巡査が往来にせきを作って人の流れを食い止めている。矢張り社会民主党の妨害に来ているのである。愛国弥次と非戦弥次との衝突は頗る面白い。社会党員はマルセイエーズの節を取った党歌を歌う。それを打ち消そうとして愛国弥次が Heil Dir im Siegerkrans. Deutschland Deutschland über Alles や Wacht am Rhein を歌う。（日記：523-24ページ）

愛国者が歌っていたとされているもののなかで，„Deutschland Deutschland über Alles“ はもっともよく知られていよう。歌詞は，ホフマン・フォン・ファーラースレーベンによるもの，曲はヨーゼフ・ハイドンによるもので，全体は三つの歌詞を持っている。そのなかで，第一番の歌詞は，現在ではきわめて特異な政治思想を持つ集団は別にして一般には歌われていない。しかし，メロディーは依然としてドイツ国歌として採用されている。この言葉で始まる歌詞は，元来諸邦にたいして統一ドイツの理念を歌ったもので，冒頭部分を先入観を含めずに訳すれば「ドイツ，何よりも大切なドイツ，世界の何よりも大切なドイツ」となるが，後にはとくにナチス期に，文字通り愛国的な意味においてあるいは帝国主義的な意味において歌われた。わが国ではこれがしばしば「ドイツ，世界に冠たるドイツ」と訳されていることは周知の事実である。ここでの論述が重要なのは，日記での記載が，すでにこの時点においてこの歌がナショナリスティックな意味あいにおいて歌わ

れていたことを傍証していることになるからである。他方の「マルセイエーズ」であるが，いうまでもなく現在のフランス国歌であり，曲，歌詞とも基本的にはクロード＝ジョゼフ・ルジェ・ド・リールによるものに端を発している。「マルセイエーズ」の解釈史もきわめて複雑な過程をたどるが，ある時期にはそれがインターナショナルと並んで社会主義運動や革命の精神を体現していたことは疑いえない。歌詞の内容については現在でもさまざまな議論が続いている。[20)]

上記の引用にあるように，当初社会民主党は開戦に反対していたが，後にその態度を変える。この間の事情について小泉は，８月１日の日記で言及している。

> 社会民主党の態度一変。好戦的輿論に屈従す。フォールヴェルツの社説には哀調あり。戒厳令の圧迫に基づく事無論なれども，社会民主党が戒厳令なきもなお従来の態度を継続したるべきや否やは疑あり。（日記：525ページ）

社会主義におけるコスモポリタニズムとナショナリズムの問題は，古くから解決困難な問題として指摘されている。ここで問われているのもまさにその問題であり，ドイツ社会民主党も例外ではないと小泉は言うのである。しかも，戒厳令によらなくともそのような態度の変更はあったであろう，と手厳しい評価を加えている。後年の小泉はマルクス批判者，社会主義批判者としてよく知られているが，そのような立場を形成するのにここで描かれている社会民主党の開戦論への傾斜が貢献した可能性もある。

第一次世界大戦直前にドイツに滞在していた外国人が，――かれらの母国がドイツにたいして敵対的な関係にある場合にはなおのことそうであるが――当時のドイツ人のふるまいにたいして好い感情を持つことは困難であったろう。小泉も，次第に好戦的になっていくドイツ人にたいして批判的な感情を抑えられないでいる。

> 間諜だと云うので罪もない外国人をむやみと往来でつかまえたり撲ったりする。殺された奴も大勢ある。殺された奴がすべて間諜であったと云う証拠は上っていない。他の事実から推測す

20）　マルセイエーズと „Deutschland Deutschland über Alles“ にかんしては，その成立過程，変遷をめぐって多くの論稿が書かれている。ここでの立論も以下にあげる諸文献から裨益されるところが大きかった。古池好（1993），木村佐千子（2005），高橋秀寿（2001），吉田進（1994）。古川論文では，オリジナルの詩では „über Alles“ の部分が，第一次世界大戦中のアメリカでは “first of nations over all in this wide world” と意訳（？）されていたことを指摘している。古川はこれが「原文を逸脱した恣意的な訳」（古川好（1993），61ページ）だとしているが，本文で述べたように，すでに歌詞が好戦的なニュアンスで歌われていたとすれば，まったくの誤訳，曲解とはいえないだろう。このへんの解釈，読みかえの歴史はきわめてスリリングで興味深い。本国でも歌詞が元来の意味を離れて歌われはじめ，これが受け入れの側でさらに反ドイツ的なムードをあおっていき，それが翻訳に反映されるということもあろう。

るならば，殺された奴は皆間諜ではなかったと云って差支えあるまい。昨夜英国大使が旅行券を請求したと云う号外が出ると，早速暴徒は同大使館を襲撃した。窓をこわしたり石を投げたりした。同大使館から出て来た西班牙大使は間違えられてひどい目にあった。（日記：531-32ページ）

小泉は学問だけでなく生活スタイルにおいてもイギリス好きであったといってよいが，その背景として，開戦直後に著しく高揚したドイツ人のナショナリズムを考えておくことは必要だろう。このようなナショナリズムは戦争時には不可避の現象だが，小泉がドイツで見聞したこと，体験したことはやはり彼をイギリスへと傾斜させたことは否定できないところである。いずれにせよ，日本がイギリスを支持することを決めた以上，日本人留学生たちがドイツにとどまることは不可能であった。小泉も友人たちとともに，オランダ経由でイギリスに脱出している。

4．エピローグ

小泉は8月15日，アンハルト駅を出発し一路ロッテルダムを目指した。4日にはイギリス政府はドイツにたいする宣戦布告を行い，前者と同盟関係にあった日本とドイツとの関係が悪化したからである。日本人留学生がドイツにとどまるのはもはや無理であった。小泉の日記は，刻一刻と緊迫する現地の状況，そして対日感情の悪化を告げている。同じ時期にベルリンに滞在していた日本人は数多くいたが，そのなかには日本を代表するマルクス主義者がいた。彼は小泉よりも9歳年上で，社交家であった小泉とはまったく異質の留学生活を送っていた。その人は小泉と同じく15日にドイツを出国，ザルツブルク，ベルトハイムを経て，17日にはハーグに到着している。そこで一泊したあと，19日の夕刻にイギリスに着いている。小泉はすでに16日にイギリス入りしているので，三日遅れである。このマルクス主義者こそ，誰あろう後年小泉と華々しく論争を展開することになる河上肇であった。[21)]

参　考　文　献

小泉信三の著作
小泉信三（1913a）：邦訳『ジェヴンス　経済学純理』同文舘。
小泉信三（1913b）：「英京雑事」『慶應義塾学報』大正2年，5月，9月，12月号。同，全集第26巻所収，1969年。
小泉信三（1922a）：「労働価値説と平均利潤率の問題」『改造』第4巻第2号。同，『価値論と社会主義』改造社，1923年に再録。同，全集第20巻所収，1968年。
小泉信三（1922b）：「再び労働価値説と平均利潤率の問題を論ず」『改造』第4巻第7号。

21）　以上の河上の足跡については，河上肇（1982），（1983），（2002）による。

同，『価値論と社会主義』改造社，1923年に再録。同，全集第20巻所収，1968年。
小泉信三（1925）：「開戦当時のベルリン日記」『改造』。同，全集第12巻所収，1967年。
小泉信三（1925a）：「三度び労働価値説と平均利潤率の問題を論ず」『改造』第７巻第４号。同，『価値論と社会主義』改造社，1923年に再録。同，全集第20巻所収，1968年。
小泉信三（1925b）：「四度び労働価値説と平均利潤率の問題を論ず」『改造』第７巻第11号。同，『価値論と社会主義』改造社，1923年に再録。同，全集第20巻所収，1968年。
小泉信三（1933）：『マルクス死後五十年』改造社。同，全集第７巻所収，1967年。
小泉信三・寺尾琢磨・永田清（1944）：邦訳『ジェボンズ　経済学の理論』日本評論社。小泉，全集第24巻所収，1969年。
小泉信三（1955）：「イギリスの学風」『東京新聞』昭和30年１月１日号。同，全集第16巻所収，1967年。
小泉信三（1962）：「私の履歴書」『日本経済新聞』昭和37年１月。同，全集第16巻所収，1967年。
小泉信三（1970）：同，全集別巻。
小泉信三（2001）：『青年小泉信三の日記：明治四十四年―大正三年：東京―ロンドン―ベルリン』慶應義塾大学出版会。

二次文献（日本語文献）
秋山加代（1981）：『叱られ手紙』文藝春秋。
秋山加代（1976）：『辛夷の花：父小泉信三の思い出』文藝春秋。
秋山加代，小泉タエ（1968）：『父小泉信三』毎日新聞社。
福岡正夫（1994）：『経済学と私』創文社。
古池好（1993）：「国歌とその問題点：ドイツ連邦共和国国歌 „Deutschlandlied“ に関する歴史的一考察」『武蔵野音楽大学研究紀要』25巻。
池尾愛子（1994）：『20世紀の経済学者ネットワーク：日本からみた経済学の発展』有斐閣。
今村武雄（1987）：『小泉信三伝』文春文庫。
石塚正英（1998）：「アメリカの四八年人：W・ヴァイトリングを中心に」的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』御茶の水書房所収。
上久保敏（2003）：『日本の経済学を築いた五十人：ノン・マルクス経済学者の足跡』日本評論社。
河上肇（1982）：『河上肇全集』第８巻，岩波書店。
河上肇（1983）：『河上肇全集』第７巻，岩波書店。
河上肇（2002）：『祖国を顧みて』岩波文庫。
慶應義塾大学三田情報センター編（1972）：『慶應義塾図書館史』。
慶應義塾経済学会（1966）：『三田学会雑誌』第59巻第11号，小泉信三博士追悼特集。
慶應義塾図書館，慶應義塾大学経済学部研究室編（1969）：『小泉信三文庫目録』慶應義塾大学経済学部。
木村佐千子（2005）：「ドイツ語圏の国歌について」『獨協大学ドイツ学研究』第53号（創立40周年記念号）。
『小泉信三先生追悼録』（1966）：「新文明」発行所。
小泉タエ（1994）：『留学生小泉信三の手紙』文藝春秋。
小泉タエ（1981）：『父母の暦』講談社。
小泉タエ（1976）：『届かなかった手紙：父小泉信三との日々』講談社。
丸山徹（1983）：「福田徳三と若き日の小泉信三」『三色旗』昭和58年８月号。同『春宵』慶應通信，1989年所収。
中山伊知郎（1968）：「解説」小泉信三全集，全集第９巻所収。
白井厚（1996）：『大学とアジア太平洋戦争』日本経済評論社。
白井厚，浅羽久美子，翠川紀子編（2003）：『証言　太平洋戦争下の慶應義塾』慶應義塾大学出版会。

高橋秀寿（2001）：「ナショナリティ」矢野久，アンゼルム・ファウスト編『ドイツ社会史』有斐閣。
高橋誠一郎（1966）：「小泉信三君追想」『三田学会雑誌』第59巻第11号。同『随筆　慶應義塾　続』慶應通信，1983年所収。
寺尾琢磨（1966）：「小泉先生と理論経済学」『三田学会雑誌』第59巻第11号。
吉田進（1994）：『ラ・マルセイエーズ物語：国歌の成立と変容』中公新書。

二次文献（欧文文献）
Dahrendorf, Ralph (1995): *LSE: A History of the London School of Economics and Political Science, 1895-1995*, Oxford University Press.
Ebenstein, Alan (1997): *Edwin Cannan: Liberal Doyen*, vol. 1, Routledge/Thoemmes Press.
Ebenstein, Allan (2004): "Foxwell, Herbert Somerton (1849-1936)", in: *The Biographical Dictionary of British Economists*, vol. 1, editor-in-chief, Donald Rutherford, Thoemmes Continuum.
Jevons, William Stanley (1879): *The Theory of Political Economy*, 2nd edition, Macmillan.
Keynes, John Maynard (1933): *Essays in Biography*, reprinted in: *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, vol. X, Mamillan, 1972. ジョン・メイナード・ケインズ『ケインズ全集』第10巻，大野忠男訳，東洋経済新報社，1980年。
Lenger, Friedrich (1994): *Werner Sombart 1863-1941, eine Biographie*, C. H. Beck.
Nishizawa, Tamotsu (2001): "Lujo Brentano, Alfred Marshall, and Tokuzo Fukuda: The Reception and Transformation of the German Historical School in Japan", in: *The German Historical School: The Historical and Ethical Approach to Economics*, ed. by Yuichi Shionoya, Routledge.
Nishizawa, Tamotsu (2002): "Marshall, Ashley on Education of Businessman and 'Science of Business'?: Marshall's School of Economics in the Making", *Study Series*, No. 48, Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University.
Robbins, Lionel (1935): "A Student's Recollections of Edwin Cannan", in: *Economic Journal*, reprinted in: Alan Ebenstein, *Edwin Cannan: Liberal Doyen*, vol. 1, Routledge/Thoemmes Press, 1997.
Tomlinson, Tom (2004): "Jevons, Herbert Stanley (1875-1955)", in: *The Biographical Dictionary of British Economists*, vol. 1, editor-in-chief, Donald Rutherford, Thoemmes Continuum.

［経済学部教授］